



長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

教職大学院

Newsletter

長崎大学大学院
教育学研究科

No.1

2009.12.1

教職大学院に期待する



長崎県教育長 寺田隆士

学校現場の抱える課題が複雑・多様化している中、教科指導や生徒指導等に関する指導力はもちろんのこと、人間性豊かで深い教育愛と強い使命感にあふれた人材の確保と育成が強く求められています。

私は教育長就任以来、「憧れ」を抱き、「品性」と「確かな学力」を身につけた子どもの育成について、機会あるごとに訴えてまいりましたが、このことは教員の資質向上に関わる課題でもあると考えています。「憧れ」の対象たるべき教師、品格・品性を備えた教師、子どもたちの進路を実現できる確かな力量を持った教師。このような教師が存在してこそ、子どもたちは憧れを志へと高め、学ぶ意味を理解し、目指す進路を実現するための確かな学力を培っていくものと信じております。力量ある教職員の豊かな教育実践があつてこそ、児童生徒や保護者の負託に応え得る信頼される学校になるものと考えています。その意味において、昨年度設置された教職大学院の取組に、私は大きな期待を寄せているところであります。

長崎大学大学院へは、毎年10名程度の現職教員が教育実践専攻と教科実践専攻の研究科で学ぶとともに、優れた見識と指導力を有する教員を「実務家教員」として3名派遣し、シラバスづくりや大学院生の指導等に当たってもらっているところです。

さらには、教員採用選考試験に合格した者で、教職大学院に在籍して研究を続けることを希望する者を対象に、大学院修了後の採用を可能とする「採用候補者名簿登載期間更新制度」を本年度新たに導入いたしました。

冒頭申し上げましたとおり、子どもたちへの深い思いと情熱に裏付けられた実践力あふれる教員の確保と育成は、重たい教育課題が山積する時代だからこそ、教育行政上のきわめて重要な課題であるとも言えます。

今後とも長崎大学教職大学院と連携し、実践力・人間力に富んだ本県教育の将来を担う有為な人材の育成に努めてまいりたいと考えております。



NAGASAKI UNIVERSITY
長崎大学大学院 教育学研究科
教職大学院

コースの特色ある 取り組みまたは授業

教職大学院の魅力を活かす 「クロスセッション」

教職実践専攻・准教授 寺嶋浩介

クロスセッションとは？

本年度、学校運営・授業実践開発コースでは、月1回・90分の「クロスセッション」を実施することになりました。このセッションは、単位取得のための正規の授業にはなっていないのですが、最終報告書となる実践研究報告書執筆のため、あるいはお互いの研さんの場として、設けられた場です。毎回2、3名の院生が実践研究の経過等を報告し、それを踏まえて討議を行います。

こうしたクロスセッションの「クロス」という言葉には様々な思いが込められています。

(1) 院生どうしの「クロス」

このコースには様々な院生が所属をしています。学部を卒業し、さらなる研さんに励むためそのまま入学した院生がいます。特に、修士2年の院生は実習を行いながら、教員採用試験への準備もしています。

もちろん、教職大学院には現職教員の院生がいることも多くの魅力です。教職歴10年を超え、スクールリーダーとしての活躍が期待される院生、中にはすでに研究主任を歴任し、新たな課題をもって入学してきた院生も少なくありません。2年コースの現職教員の院生ですと、学校の勤務もありますので、勉強との両立が大変です。

これらの人々が月に1回、全員集まり一緒に勉強するというのは大変有意義であると思います。学部卒の院生が机上の空論を述べるなら、現職教員の院生から「暖かくも厳しいコメント」がとぶこととなります。逆に、現職教員でも、理論的な背景などがあいまいであれば、自分が教えた世代、あるいは自身の子どもの世代の院生に「指導」されることもあるかもしれません。

(2) 教員の「クロス」

院生だけではなく、実は教員も「クロス」しています。これは教職大学院のひとつの特徴でもあるのですが、教員組織は研究者教員と実務家教員で構成されています。研究者教員は、ある特定領域において高い専門性、研究業績を持っています。一方実務家教員は、長い間初等中等教育の学校現場の仕事に従事してきたベテランの方で、近い将来、長崎県の教育界の中心を担っていく方々です。これらの教員も一同に介します。

当然、両者は足りないところを補う関係にもなりうるのですが、違うことをそれぞれの立場や専門分野から語っていたとしても、実は本質の部分では変わらないことを議論しているケースが多々あります。クロスセッションを通して、教員も自分の視

点を見つめなおし、反省したり学んだりしているわけです。

(3) 実践研究分野の「クロス」

学校運営・授業実践開発コースのひとつの特徴は、多様な課題を持つ院生が集まっているという点です。学習意欲の向上、話し合い活動、小学校外国語活動、保健体育における自己効力感、など十人十色の研究課題を持っています。多くの方に門戸が開かれているコースですが、このようなテーマでは当然、10名近くいるコース担当教員が個々に取り組んでいるだけで対応できるはずもありません。ましてや、実践研究は学校での現実場面を取り扱います。その問題解決に必要な知識は日々刻々と変化しています。

このような状況において、コースが一丸となって問題解決に取り組んでいます。恥ずかしながら、問題に対する答えが出ない時も結構多いわけですが、その問題の本質に少しでも迫れるように努力をしています。

問題解決に必要な知識は日々刻々と変化しています。

厳しく、激しく、楽しいセッション

現在、このクロスセッションは月1回、通常は金曜日の夜18時から開催されています。講義や実習に頭も体も疲れた1週間、誰もが早く帰って休みたいと思っているに違いありません。ただ、参加する限りは何かひとつでも学んで帰ろうと、みんな懸命に努力しています。

コース教員全員の前での発表は相当緊張するのではないかと思います。自分のやっていることに対して、サンドバッグのようにメッタ打ちにされるのでは・・・と思ったりします。しかし、このセッションはそのようなことを目指しているのではありません。これまでの大学だとそのようなイメージが強いわけですが、私たちが目指しているのは「建設的」なセッションです。次の一步を踏み出すにはどのようなことが必要か、発表者の意図をくみ取りながら、みんなで考え、その答えを少しでも正解に近い形になるように練り上げていくのです。

だから、参加者に求められる最大の要件は「建設的な意見を発言すること」です。「みんなの前だから・・・」と考え、発言しない院生の人がいるとすれば、それは会に顔は出している、貢献しているとは言えません。参加が無駄とは言いませんが、参加の意味は半減しているといえます。また、実現不可能な手厳しい発言だけをする教員も無視されます。そういう意味では、教員にとってもその資質を求められる厳しい場、といえるでしょう。

厳しく、激しく、そしてそれが「楽しい」、充実したセッションにつながるのではないかと考えています。ちなみに、終了後は近くの居酒屋などで懇親会が開かれます。これは何も考えることなく「楽しい」機会を過ごすことができます。このときからようやく、週末の穏やかな風が吹き始めます。

この試み、まだ始まったばかりですが、今後、さらなる充実に向けていろいろと議論を重ねていくつもりをしています。たまには外部からゲストスピーカーを呼んだり、ワークショップ形式で進めるのも面白いかと思います。今後、修士生が増えたら、これを交流の場にしていきたいと思っています。

これを読んで興味をもった方、大学院受験を考えている方、一度参加してみませんか？

燃え尽きないために

教職実践専攻・教授 朝長昌三

「燃え尽き」は、自分が最善と信じて打ち込んできた仕事、生き方、対人関係のもちかたが、全くの期待はずれに終わったことによってもたらされる疲弊のありさま、と定義されたり、援助活動を行っているうちに精神的活力を使い果たしたために起こる症候群で、心身の極度の疲労と感情の枯渇、自己嫌悪、仕事嫌悪、思いやりの喪失などからなる、とも定義されています。そして、医療従事者や教育関係者などの燃え尽きについての研究が行われています。

そこで、「燃え尽き度診断」テストを幼稚園から高等学校の113名の教師に対して行いました。本テストの質問内容は、「過去6ヶ月間のあなたの生活を、仕事とプライベートの両方で振り返ってみてください」というもので、質問項目は25項目でした。結果は、「うまくやっています」が32名で、「予防策を講じれば大丈夫です」が69名、「燃え尽き予備軍です」は11名、そして「燃え尽きになっています」が1名でした。以上の結果から、「うまくやっている」教師は28%で、何らかの「予防策を講じなければならぬ」教師が72%ということがわかりました。

「うまくやっています」という結果を得た人のなかには、「過去1年間だったら結果は違うでしょう」とか、「2年前、うつ状態になり、1年半休職しました」、「昨年は、失感情症だったんじゃないか」、「5年前であれば、こういう結果は得られなかったと思います」、「うまくやっていますという結果であったけれども、多忙で疲れているという自覚がある」という人もいました。そして対策として「仕事を抱えこまないで、同僚と助け合う」、「仕事とプライベートのバランスをとる」があり、また仕事に関しては「計画的に仕事をしたい」、さらには余暇の過

ぎし方として「趣味をもちたい」や「運動を定期的にしたい」といった意見が多くありました。

「予防策を講じれば大丈夫です」という結果を得た人の改善策として最も多かったのは「運動をする」、「趣味をもつ」、「休息をとる」、「精神的なゆとりをもつ」、「睡眠をもっととる」でした。また仕事に関しては「仕事を減らす」、「同僚と話し合いをもつ」、「同僚と協力して仕事をする」と考えているということでした。

「燃え尽き予備軍です」という結果を得た人は、「仕事とプライベートの区別をする」、「仕事のなかに喜びを見つける」、「計画的に仕事をする」、また「趣味をもつ」といった改善策をとろうとしていることがわかりました。

「燃え尽きになっています」という結果を得た人は、現在通院していて、「仕事の量を軽減する」、「仕事を家に持ち帰らない」といった仕事に対する改善策や、「休日には休養する」、「早目の就寝」といった改善策を講じているということでした。

燃え尽きの対策はパーソナルパワー（自分の力）、すなわち「私はできる」といった感覚（自分で仕事をコントロールできると信じること）にある、とする意見があります。その意見によれば、パーソナルパワーへと向かう道として8つあるということです。それを紹介して、この稿の終わりとしします。

- ① 自分を管理する
- ② ストレスをコントロールする
- ③ ソーシャルサポートを構築する
- ④ 仕事のスキルを高める
- ⑤ 仕事を自分に合わせる
- ⑥ 転職する
- ⑦ パワフルに考える
- ⑧ 心配事を断ち切る

日食時の珍現象について

武藤浩二（長崎大学 教育学部）

皆さんは7月22日にあった部分日食をご覧になりましたか？長崎大学でも大勢の職員・学生がキャンパス内で観察を行いました。珍しい現象が目撃されました。

写真1はほぼ最大食時の太陽をフィルタ等を用いずに直接



写真1 日食本体（ほぼ最大食時）



写真2 雲間に観測された反転像

【特集】現職教員座談会

座談会『大学院で、現職教員、今を語る』

○○よりよい教育実践に向けて○○

院生の研究室には、○○さん、○○君という呼び合いが飛び交っている。

互いに先生と呼び合うのは止めよう、苗字ではなく、下の名前で呼び合おうと皆で決めたからである。偶然の出会い、挨拶をしてすれ違うだけなら何も生まれない。

教職大学院の院生は、先生という殻を脱ぎ、感じたこと感じていることを率直に交流し、分からないこと分かったことを大切することで、それぞれの教育に対する思いを形に変えようと努力している。

今回、その一端を届けたい。

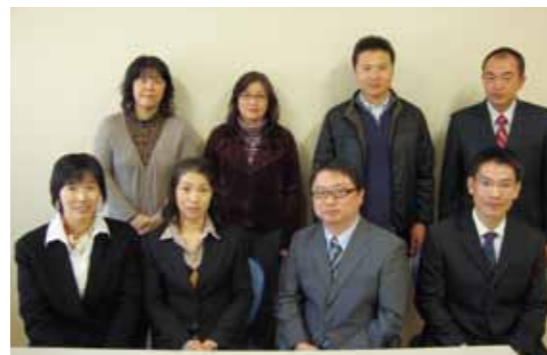
<参加者>

- 川上 京子 (特別支援学校教諭/教職実践専攻/子ども理解・特別支援教育実践コース)
 小松美香子 (特別支援学校教諭/教職実践専攻/子ども理解・特別支援教育実践コース)
 吉川 透 (特別支援学校教諭/教職実践専攻/子ども理解・特別支援教育実践コース)
 岩崎 玲子 (小学校教諭/教職実践専攻/学校運営・授業実践コース)
 松尾 博愛 (中学校教諭/教職実践専攻/学校運営・授業実践コース)
 森田 学 (中学校教諭/教職実践専攻/理科・ICT教育実践コース)
 田中丸 香 (小学校教諭/教職実践専攻/国際理解・英語教育実践コース)
 吉田 謙吾 (県立高等学校教諭/教科実践専攻/国際理解・英語教育実践コース)

<聞き手>

地頭菌健司

(長崎大学教育学部/学校運営・授業実践コース担当)



Q 大学院に入学されて半年が過ぎました。現在の心境についてお聞かせ下さい。

大学院に来たことで、
学校現場の抱える課題の解決に、一助を果たすことができました。

岩 崎：学校現場と大学とはかけ離れているところがあるが、自分たちはパイプ役ができると思った。実際に特別な支援がいる子どもがいるので、笹山先生に校内研修に来ていただいて、解決できた。

田中丸：現職の院生が実習に行くことによって、現場で困っていることを他の現職院生に相談し、カリキュラムや個別の支援計画を作成できたこともある。

授業を客観的にみること、
授業について理論的な研究することは貴重な時間です。

森 田：現場にいる時、「10年いたら授業はなかなか変わらない」と言われ、いつか授業について研究したいと思っていて大学院に来た。最初は、大学院で実習があるのかというあまり良くない気持ちで入ったけど、実際に実習に行ってみると、教える立場から見る立場に変わることによって、授業を客観的に見ることができるようになった。

吉 田：大学院に入って自分の時間に余裕ができたので、様々な専門書を読んだり情報収集ができるようになった。今まで何となくやってきたことの振り返りができたとともに、これからの授業スタイルについても、自分の見る視点などを考えられるようになった。子どもたちの学力をどう伸ばすかを考えられるようになった。

小 松：いろんな先生と関わって、納得してやれるのはとてもいいと思う。今まで勉強する時は独りでかじりながらやっていたが、深い部分で結びついていなくて、それを使って実践しても、できなかったらできなかったで日々の業務に流されてきた。大学院に入って深く考えながら理由から突っ込んでいけるのはとてもいいと思う反面、理論的なことを勉強するのは時期がずれていると感じることもある。

あらためて同僚性や異校種交流に関心がたかまりました。

松 尾：今「同僚性」に着目している。どうしても中学校では教科の独立性が強い。支援を必要とする子どもたちに関する情報の共有を職員室などで行っていけたらと思っている。コミュニケーションだけとかせまい範囲でもいいけど、協同で何か活動ができたらいいと思っている。

吉 川：異なる校種の子どもたちのことはあまりわからないので、実習で異なる校種に行けるのは本当に役に立つ。特別支援コーディネーターになった時に役に立つと思っている。前期に、小学校で授業をしたけど、見るのと自分が前に立って話すことは違うと感じた。子どもの反応や教師の発問に対する新しい見方ができるようになった。異校種を体験することによって子どもの見方が広がった。

教育実践研究 ただいま進行中

理科・ICT教育実践コース 2年 植島雄飛

「教育現場での即戦力」を目指したこの大学院での講義は、やはり実践的な内容のものが大半を占めている。ワークショップやディスカッションも多く取り入れられ、より活動的な内容であることも特徴である。それらの活動を通して自らの資質や能力を向上させると同時に、より現実的な思考力が身に付いているのではないと思う。

また、大学院では10単位の教育実習が課せられている。それぞれについてテーマを設定し、それに沿った視点で実習に取り組んでいる。そこで学んだことは、教育現場における「積極性」の大切さである。部活動やあいさつ運動、下校指導などに積極的に参加していくにつれ、授業に対する生徒の姿勢も変化しているように感じた。授業力も確かに必要なことであるが、生徒との信頼関係も前提として重要であると再認識した。今後の実習においてもそれを忘れずに取り組んでいきたい。

学校運営・授業実践開発コース 2年 野口拓也

私はこれまでに、難しい課題にも立ち向かい、自分の力で解決していく児童の姿をたくさん見てきた。そんな児童が秘めている力を様々な場面で発揮できるようにすることが教師として必要ではないかと考えた。そのために、グループを柱とした授業づくりや学級づくりを実践することで、児童が仲間と協力しながら、自分たちの力を発揮し成長していけるのではないかと考えた。

実習においては、児童がクラスメイトと協力しながら学習を進めていくことに対して、望ましいと考えているということがわかり、また教師が児童の主體的な学びを保証するために実践している支援、児童が学ぶ楽しさを味わえるための授業の工夫について見取ることができた。そして集団の強みや弱みを抽出し、児童が学級づくりにもっと主體的に参加できる仕組みをつくり、児童の自他尊重と学級規範の醸成を図った。

今後も、児童主体のグループ活動が展開できるような学級づくりについて考えていく。

子ども理解・特別支援教育コース 2年 松谷麻美

私は、子ども理解・特別支援教育コースに所属し、週に2回、小学校での実習で「通常学級に在籍する特別な教育的配慮を必要とする児童の学校適応について」の研究を行っています。実習では、1つの学級に入らせていただき、学習支援などを通して、実習先でのアンケートや、行動観察、聞き取りな

どを基に、研究を進めていきます。これまでに、学級の子どもたちに学級満足度についてのアンケートを行い、教育上配慮の必要な子どもたちが学校生活をどのように感じているのかが明らかになりました。今後は、担任教師の学級経営や特別支援教育に関する捉え方や、学校の特別支援教育の機能度に関するアンケート調査を行い、配慮を必要とする児童の学級適応に関わる要因を見つけ出し、より多くの対象に調査を行い、その妥当性を検討していきたいと考えています。

今後も、児童主体のグループ活動が展開できるような学級づくりについて考えていく。

子ども理解・特別支援教育コース 2年 瀬戸 梓

私は子どもたちに適切な指導と支援を行うことができる高い専門知識と実践力を持った小学校の教員を目指し、大学院に入学してから1年半がたちました。私の場合、教員免許状を有していないため、免許状に必要な授業科目を履修することが先となっています。そのため学部で開設されている多くの必要な科目を履修しながら、空いている時間に大学院の実践的な授業を履修する毎日です。学部の授業では、主に各教科の自己理解を図り、指導法を考えていくという教員の基礎を養っています。一方、大学院では学部での学びをさらに深め、考えていくというものが多いです。これまで、私に基礎ができていないため、大学院の授業が分からないという場面を何度も経験してきました。しかし、そのたびに聞く・調べるなどの解決策を考え、乗り越えてきたように思います。今秋から実習が始まります。今後は今持っている知識を更に深め、考える機会になることでしょう。

今後も、児童主体のグループ活動が展開できるような学級づくりについて考えていく。

国際理解・英語教育実践コース 2年 三浦隆博

みなさん、こんにちは。3年プログラムには、現時点では教員免許は持たないけれども、「どうしても教師になりたい」との迸る情熱を持って教職大学院に飛び込んできた老若男女を問わない学生の熱気で溢れています。学部の科目と大学院の科目を3年間で修了しなければならないため少々ハードですが、現職の先生方、大学院の学生、学部の学生と、幅広く交流でき視野も広がります。何よりも、教師への夢や志を持った仲間と切磋琢磨しながら学べるのが一番の喜びです。現在は夏休みですが、10月から始まる教育実習に向けて、準備を着々と進めています。実習では、失敗を恐れずに、生徒たちの心に何か1つでも残せるように頑張ろうと思っています。来年度も1年に渡る実習での研究レポートの作成、そして教員採用試験があり、立ち止まる暇はありませんが、近い将来に学校現場で活躍する自分の姿、生徒たちの最高の笑顔イメージしながら自己研鑽を積んでいます。

教職大学院シンポ 報告

教職大学院「課題研究」 全国協議会の概要報告

教職実践専攻・准教授 呉屋 博

この協議会は、東京学芸大学教職大学院の専門職大学院等GPとして、教職大学院における「課題研究」の在り方についての情報交換を行い、これらの情報を各大学の取り組みの充実・発展に資することをねらいとするものです。今回は17の教職大学院が集まり、第1回全国協議会が開かれました。



教職大学院「課題研究」第1回全国協議会
東京学芸大学(平成21年7月18日)

○参加大学院

宮城教育大学、山形大学、群馬大学、東京学芸大学、早稲田大学、創価大学、玉川大学、帝京大学、福井大学、常葉学園大学、静岡大学、愛知教育大学、京都教育大学、奈良教育大学、福岡教育大学、長崎大学、宮崎大学

○主な協議事項

- ・教職大学院における「課題研究」の意義
- ・「課題研究」に関する担当教員の連携
- ・「課題」の設定に関する指導
- ・「課題研究」の在り方に関する指導
- ・実習における「課題研究」の位置付け
- ・実習連携校の体制と研究計画との整合性
- ・「課題研究」の単位化
- ・ストレートマスターと現職マスターとの関わり
- ・実務家教員と研究教員の役割と連携
- ・到達度評価のための指標と学生の自己評価
- ・生涯学び続ける教師像
- ・学校におけるリーダー像
- ・学校や教育委員会からのニーズへの対応
- ・大学院の特色を出す優れた実践
- ・教職大学院に求められるもの

○協議会のポイント

- (1) 課題の多くは共通しており、むしろ、独自性を維持するための取り組みが各大学院にとっての重要な要素の一つであるように思われます。
- (2) 「課題研究」を単位化している大学院と単位化をしていない大学院(6大学院)がありますが、院生が「課題」を設定して取り組むことは共通していることから、「課題研究」の実質的な必要性については共通に認識されていると思われます。

○各教職大学院の取り組み

教職大学院における「課題研究」は、院生自らが学校現場や教育にかかわる問題意識や課題を見出し、その改善や解決に向けた方策を模索するものです。

現職の院生は教職経験の中で抱えているものや所属する学校にかかわる課題の設定が多く、ストレートマスターは未踏の領域に夢と理想を抱きつつ、垣間見る現実との対比の中に課題を見出すようです。各教職大学院は、現職とストレートマスターの両者が互いの視点から交流を深める中で、学校現場の活力として有効な手立てを模索する学びと研究に取り組んでいます。

また、院生、大学の教員、教育委員会等関係機関の連携を深め、成果報告や研究協議の場をしばしば設けて、研究の深化と普及に取り組んでいます。

○おわりに

たいへんに多忙な中、協議会に参加されたみなさんは、学校の先生方の活力、ひいては児童生徒の学ぶ意欲を高めることに日々心を砕いていらっしゃる事が伝わってきた1日でした。休憩時間に協議会場近くの池の畔に悠然と休んでいたカモたちが対照的で印象に残りました。教師はやすらぎや充実感をどのような時に感じるのでしょうか。

第2回全国協議会は平成22年2月に予定されており、ストレートマスターの「課題研究」の成果と課題について協議を行う予定です。



協議会場近くの小池の畔で悠然と過ごすカモたち
東京学芸大学キャンパス内

意欲について考える

東京大学市川研究室訪問記

教職実践専攻・講師 香田公裕

「的確な子ども理解力を起点とした、スクールリーダーの育成・即戦力教員の養成」等々現場力を持った教員の育成・養成をミッションとして、本教職大学院がスタートしました。

この理念のもと、実務家教員としてその一翼を担うべく努力してきたつもりですが、力のなさを思い知る毎日です。ただ、研究者教員や院生と協働できる体制が構築されつつある現在、いよいよ“動き始めた”ことを実感しています。

さて、今日、学校教育を巡る様々な課題が顕在化し、それぞれの問題に適切に対応しようとする学校現場の弛まない努力やなかなか報われない苦労が見られます。

例えば、学力低下論に対する学力向上対策です。学力向上対策は現在、大方二つの方向から取組みがなされています。一つは、教師の授業力の向上を基盤とした「わかる授業の展開」であり、もう一つが、家庭との連携による基本的な生活習慣の確立を前提とした「家庭学習の定着」です。

「わかる授業の展開」は、これまでも問題解決的な学習において、子どもの主体性を尊重しながら推進されてきました。そこでは、自力解決の姿勢が育ってきたことなどが、成果としてあげられます。しかしながら、教えることにためらいを持ち、結果として学習した事項の定着が不十分ではなかったかという指摘があるのも事実です。

わかる授業をおこなうことにより、全ての子どもが、授業後にわかった喜びと共に、理解した内容を自分の言葉で語れることが大切であると考えます。大切なことは、“わかったつもり”ではなく“確かにわかった”という子どもの姿です。つまり、基礎的・基本的事項の確実な習得なくして、学力の向上はあり得ないということです。

東京大学の市川伸一氏は、認知心理学の立場から、次のように論じています。「知識があつてこそ人間はものを考えることができる。学習の過程とは、与えられた情報を理解して取り入れることと、それをもとに自ら推論したり発見したりしていくことの両方からなる。」

そして、この考えを基本として、習得の学習においては、教師がていねいに教え、子どもに考えさせ、子どもの理解状態を把握する手だてを講じながら、知識や技能を身に付けさせる「教えて考えさせる授業」という習得型の授業モデルを提案しています。

長崎県教育委員会は、市川氏の理論を参考にし、昨年度、長崎県版の「教えて考えさせる授業」を作り上げました。そして、

講習会や出前講座等を通して、県下各地に確かな学力定着のための授業スタイルの提案をおこなっています。

そのどちらにも共通するのは、基礎的・基本的な事項の定着をめざす授業スタイルをとり、教師の的確な子ども理解力により授業スタイルを柔軟に運営するということです。すなわち、基本的な型は持ちつつも、子どもの姿によって、学習過程の比重が変化していくというものです。

ただ、どのように授業スタイルを工夫しようとも、子どもが学ぼうとする意欲を持たない限り、学習が成立しないことは言うまでもありません。意欲という言葉は、学校現場では、常に出てくる言葉です。それだけに、教育の成果を左右するものです。

ところが、種々の調査等により、学習意欲の低下が明らかになっていることは周知の事実です。このことが、「見える学力低下」以上に深刻な問題ではないかと考えます。

意欲があるかないかは、測りにくいものです。しかしながら、その測りにくい意欲を、今まで教師は、その経験から主観的に評価してきました。それはそれで、とても重要なことでもあると考えます。主観的な評価を下すまでに、いくつもの客観を積み重ねる努力をしてきたからです。

ただ、一方では、教師の力量が問われている昨今、主観的な評価を不安に思う教師も少なくないと感じます。主観的に評価し講じた手立ては果たして妥当なのか。効果はあったのかなかったのか。継続していいものかどうかなどです。

学習意欲に大きな影響を与える学習動機について、従来の内・外発的動機づけにだけでなく、市川氏は、2要因モデルを提示し、学習動機をより多面的に把握しようとしています。意欲を向かう方向性により行動としてとらえ、2要因モデルと関連させながら、学習意欲の向上度を測り、授業改善の方策をつかむ取組みもなされています。

このように、意欲をデータとして、講じた手立ての前後で測れたら、その結果と自分の見取った意欲との比較ができたなら、その積み重ねが教師の力量を高め、わかる授業の展開の大きな一助となりうると考えます。さらに、それを活用し家庭における学びへもつなげていける可能性も見えてきます。

冒頭にも記載しましたが、本教職大学院の目的の出発点は、「的確な子ども理解力」です。多忙な現場の教師が取り組みにくい、意欲などの子どもの実相を明らかにする方略を実践的に研究し発信していくことも、本教職大学院の使命と考えます。

<参考文献 等>

○市川伸一『学ぶ意欲の心理学』PHP新書 2001

○市川伸一『教えて考えさせる授業』を創る 図書文化 2008

○長崎県教育センター『教えて考えさせる授業』リーフレット 2008

STAFF紹介

子ども理解・特別支援教育実践コース



谷口弘一

本年度四月より長崎大学に勤務させていただいております。長崎は生まれて初めて住む街ですが、学内外ともに周りの皆さんから大変親切にいただき、とても居心地よい環境で仕事や生活をさせていただいています。私の専門分野は心理学です。大学院の子ども理解・特別支援コースでは、「児童・生徒の理解と指導」、「発達と学習の過程」を担当しています。現職の先生方からは、学校現場で子どもが抱えるさまざまな心理的問題について、具体的なお話を聞かせていただき、私自身が勉強をさせていただいています。先生方とのディスカッションを通して、理論と実践をつなぐ新たな研究テーマをぜひ探っていきたいと考えています。

現在、私が取り組んでいる研究テーマは、児童・青年・成人を対象として、対人関係の肯定的・否定的側面が個人の精神的健康や適応に与える影響について、発達の観点から検討することです。対人関係には、何か困ったときに助けをもらうことができるという肯定的側面と、意見がぶつかり合って対立や衝突をしてしまうという否定的側面があります。こうした対人関係の2つの側面が、個人の精神的健康や適応にいかなる影響を及ぼすか、そして、その影響が個人の発達段階によってどのように変化するかについて詳細に検討を行っています。

それではここで、私の研究テーマについて、もう少し具体的にお話をしてみたいと思います。友人、両親、あるいは職場の同僚と意見がぶつかったり、いい争いをした時のことを思い出してみてください。皆さんなら、そうした状況に対して、どのように対処するでしょうか？

以下の3つの選択肢の中からお答え下さい。

- ①相手のことをよく知ろうとした、
- ②無視するようにした、
- ③自然の成り行きに任せた、…実はこの3つの対処方法のうち、どれを選択するかによって、その人の心の健康状態が大きく左右されてしまうのです。正解は(?)、もしよろしければ、拙著『対人関係と適応の心理学』(北大路書房)をぜひご覧下さい。



鈴木保巳

特別支援教育では、支援の手がかりとして子どもの実態把握が不可欠であり、支援経過における診断的・形成的・総括的な側面で、子どもの行動(変容)の意味や発達段階等が評価されることとなります。私は、子どもの発達・行動評価に神経活動の計測(脳電気活動等)を利用しており、客観性の高い生理学的情報に基づく実態把握とこれを利用した支援のあり方についての考究を続けています。専門分野は、障害のある人の心理や行動の基盤を生体電気現象により追究する障害児(者)生理心理学です。

生理学や病理学、ましてや生体電気現象といった単語を聞いただけで、「医学的な知識で難しそう」、「他の専門領域のことで教育の現場にはあまり関係のない知識」と思われてしまいがちです。しかし近年、特別支援教育において脳神経科学で得られてきた知見を教育に利用しようという気運が大いに高まってきており、平易な用語を用いた専門書の出版も相次いでいます。特に最近では、軽度・広汎性発達障害領域の研究進展には目を見張るものがあり、自閉症やLD、ADHDの行動の神経基盤について日の出の勢いで追究されつつあります。さらに、エビデンスベースの支援の重要性についての認識も高まり、脳神経科学領域で得られた知見を子どもの行動理解の客観的根拠として、積極的に教育支援に利用することが志向され始めています。

教職大学院では、私は「特別支援教育の生理・病理学」、「肢体不自由児の理解と支援」の授業を担当しています。講義・演習形式での進行となりますが、生理学や病理学の専門知識をできるだけ平易な言葉で且つ実際の人の行動と結びつけてお伝えするように心がけています。どうか皆さん、ご自身の中に専門領域の垣根を立てないで下さい。障害のある子の行動の意味や発達段階はともすればわかりづらいものですが、必ずその基盤になっている「何か」があるはずで、その「何か」の真実に少しでも近づくために、生理学・病理学さらには心理学の領域に積極的に越境し、知識を習得していきましょう。より適切な支援方法を選択・開発し実践するための確度の高い情報を得る手がかりとなるはずで、

STAFF紹介

学校運営・授業実践開発コース



柳田 泰典

はじめに

私は、教師の学級指導メッセージを中心に研究しております。教職大学院では、学級経営、地域教育および教育実践実習を担当しています。

1. 思えば遠くへ来たもんで25年

長崎に来て驚かされたことは、名詞をあまり使わない、感情表現が激しいということです。「テレビ消すやつとって」「黒板消すやつとって」などと言われ、リモコンだろう、黒板消して言えよとまだに反応しております。また、「そげんするけんこがんなんと」「なんばしよと」などと怒られると、もっとやさしく言えよと考えこんでしまいます。

こんなことがきっかけで、学級ではどんな言語が飛び交っているのかを研究するようになり、10年以上経ちました。

2. 学級指導メッセージの主語に注目

教師の学級指導メッセージは、学級を組織する原理だと考えております。このメッセージの構成要素は、主語形態、原因の帰属様式、自己-他者関係、ソーシャル・スキルですが、重要なのは主語形態です。

主語は3つ、私たち (We have to)、あなた (You must)、私 (I think) です。例えば、掃除をしないA君に対して、(私たち)「みんな頑張っているのに、恥ずかしくないの」、(あなた)「そんな人はクラスにいません、出て行きなさい」、(私)「掃除は明日のための準備活動です。しないならしない理由を言うべきです」などですが、研究としては、どれが効果的かではなく、どうあるべきかが課題です。

3. 授業におけるIDCSE—self learning

授業分析もしています。多くの授業は、「今何時ですか」「5時です」「よくできました」というIRE構造です。これを教材のレベルアップ、探求を中心とする授業をめざし、Initiation—学習discourse—学習discourse care—Sharing—Evaluation—self learningという仕組みを構想しております。

おわりに

人生、努力しているうちは学ぶものである。それを率先して実行すべきなのは、私たちではないでしょうか。

理科・ICT教育実践コース



長島 雅裕

大学院では、天文・気象分野に関連するトピックスについて、ICTの活用方法を交えて教えています。

私の専門分野は天文学・宇宙物理学です。主に「銀河」と呼ばれるクラスの天体について興味を持っています。銀河とは、およそ数十億～数千億の星の大集団で、楕円形のものや渦を巻いているものなど多様な形態を有しています。そのような天体の形成や進化を貫く物理法則は単純であり、生命や社会現象のような複雑なものではありません。しかし、単純な法則がいくつか組み合わさるだけで、予想もつかないような複雑な現象が生み出されます。多様性の背後にある法則性を見極める、ここに自然を理解する面白さがあると思っています。

このような多様性を理解するためには、様々なアプローチが必要です。私は、コンピューターシミュレーションを使いながら、理論的に銀河の形成過程を調べています。面白いことに、宇宙137億年の歴史の中で、誕生後約40万の物質の分布はかなりよくわかっています(「宇宙背景放射」)。ところが、その後、物質の分布がどう進化し、銀河となっていったかはよくわかりません。そこをコンピューターを使って計算するわけです。計算結果と現実の観測結果とを比較することで、理論モデルがどれだけ正しいかがわかります。

このシミュレーションの結果が、自然科学研究機構・国立天文台の「4次元デジタル宇宙プロジェクト」(<http://4d2u.nao.ac.jp/>)により、誰でも見られるムービーになっています。このプロジェクトでは、他にも最先端の研究を使ったムービーをいくつも作成しています。ICT教材の一つとして活用方法を考えてみてはいかがでしょうか。

天文教育では、対象を手にとって実験するわけにはいきませんので、どれだけリアルなイメージを構築できるかが鍵となります。夜間の観測をする機会は少ないため、様々な教材を駆使することが重要です。ICT教材の活用は効果的に天体のイメージを得るのに役立つでしょう。もちろん、画面は2次元でしかありませんので、簡単な3次元の模型と相補的に活用することが大切です。

実践や教材研究を支えるものは基礎学力です。大学院生の皆さんには、精一杯勉強し、強固な土台を作ってほしいと思っ

STAFF紹介

国際理解・英語教育実践コース



松元 浩一

英語学の務め 勉め 努め

人文学の大きな特色のひとつはことばの重視です。ことばを直接の研究対象とし、ことばの批判的検証を主たる課題とする領域は人文学においてほかにはありません。このなかにわたしが専攻する英語学も含まれています。

英語学は、英語のなかに生起するもろもろの現象の奥にひそむ法則性を、観察事実を拠り所として解き明かそうとする研究分野です。なかでも、わたしは、近・現代英語の統語構造、つまり文法を研究しております。たとえば、文法がさまざまな表現を駆動しているエンジンであるとすると、英語学は、そのエンジンの仕組みを解き明かし、効果的な表現を作り出しているメカニズムを説明することを目指します。こうした文法研究は、経験科学的なものです。学問であることを志向する以上、反証可能性 (falsifiability) がなければなりません。そ

のため、非科学的なドグマを排し、客観的なデータ、つまり言語事実を最重視します。ただし、“Mere facts tell us virtually nothing.” です。言語事実は眺めるだけでは何も語ってくれません。見ようと思っても、努めて見つめなければだめです。ですから、さまざまな英書を読んで言語事実を渉猟する場合、「読み込んでこそ」と言えます (“It’s dogged that does it.” です)。また、高校までは「正しい英語」を学ぶことが専らですが、「正しくない」言語事実にも注目して、なぜそれが正しくないのかを、個別的ではなく、(英語の他の現象や他言語の類似現象とも比較・照合しながら)一般的に説明することを目指します。一方で、文の正しさにかかわる要因には、語の配列や統合の仕方を規定している文法だけでなく、人間が文を聞いて理解しやすく、意味を処理しやすいかどうかということもかかわっています。このような心理的要因も英語学が解明しようとする射程に含まれています。

ことばは人が生きてゆくために備わっている能力です。生活の中で役立つように仕込まれていることは言を俟ちません。つまり、ことばに関する知識、文法というものは、そもそも実践的に、効率的に作られているはずのものです。実践的なコミュニケーションとよく言われますが、非実践的なコミュニケーションなどというものはありません。その意味で、コミュニケーションを支えている文法は、本来現実的に構築されている、ヒトという種に生来固有に備わっている能力といえます。ヒトとチンパンジーのDNAの違いは1.23%。この僅かなすき間に、ヒトがもつ文法能力が潜んでいるかもしれません。ヒトが話すことばの解明は、21世紀に入ってDNAの研究とも連動しています。これからもますますことばの窓から大きな世界を見る営みは続きます。

編集後記

教職大学院は、未知との遭遇のようです。現在は、とにかく何でもありの模索を続けておりますが、一刻も早く創造という段階を迎えたいと思っています。

このNews Letterは、現在の模索をしっかりと行うために、現状を理解し合うこと、さまざまな意見を交流し合うことを目的に発行しました。教育実践の高度化、教育現場と大学の協働を実りあるものにするためには、具体的かつ実践的な交流を継続的かつ確実に行う必要があるからです。

「教職大学院って何」という問いになんとか答えるレベルから、教職大学院はすこいと言っていたらいいように

するためには、現職教員の参加による実践課題の多様な提起、ストレートマスターによる実践研究の高度化、大学教員の実践研究の高度化の3つを有機的に発展させなければなりません。

このNews Letterは、宣伝紙ではありません。今、私たちに必要なものは、教育実践を発展させるための批判と提案であり、教育実践を高度化させたいと願う皆さんの参加です。

執筆していただいた皆様に感謝するとともに、皆様のご批判、ご提案、そしてご参加をお願いいたします。

柳田 泰典



NAGASAKI UNIVERSITY
長崎大学大学院 教育学研究科
教職大学院